

<奨励賞 7団体>

■ 関西木造住文化研究所 (京都)

団体概要	<p>全国で衰退しつつある木造伝統住文化の再生・継承・発展の可能性とその手法を、建物単体だけでなく、都市・文化・地域社会等とのかかわりの中で研究・提案・実践するために1998年に設立された。地震発生前の段階から、伝統住文化と暮らしの安全が両立した住まいづくり、まちづくりを研究・実践し、成果を広く社会に発信。</p>
事業概要	<p>本事業では「中越大震災 被災住宅おたすけ隊」として、大きな住宅被害のあった山古志の集落における全壊被災建物の修復現場の実地見学にあわせて、このままでは消えつつある伝統建築への理解と評価を高め、技術の普及・伝播を図るフィールドワークを行う。また、昨年の修復コーディネートの実績を踏まえ、被災建物の修復に関する情報を集積、データベース化することで、いつ起こるかかわからない災害へ備え、適切な情報発信が図れるよう備える。</p>
講評	<p>住宅の復興に対する復興支援活動は、専門性を生かしたユニークな支援活動であり、かつ、その必要性が高いことを容易に理解できる。また、住宅を単なる住まいとしてだけではなく、住文化として文化・まちづくりの目線で捉えなおし、伝統建築への理解と評価を高め、文化の継承へとつなげる当団体の活動は、新しいタイプの防災・減災活動の一つであると言える。</p>

■ 北区聴覚言語障害者福祉協会 (兵庫)

団体概要	<p>神戸市北区にすんでいる聴覚障がい者のコミュニケーション保証や情報保証、福祉の向上、聴覚言語障がい者に対する理解の啓発などの活動により住みよい地域づくりを目指している。当事者の自立推進や研修会の開催、地域住民を対象にした手話講習会や知識啓発などの活動を実施している。</p>
事業概要	<p>本事業は、既存の制度では対策が手薄になりがちな聴覚障がい者を対象に災害対策マニュアルを作成、その後、防災知識の提供と学習会の実施するものである。あわせて、地域住民への聴覚言語障がい者対応知識の啓蒙活動を行う。</p>
講評	<p>外見からはわかりにくい聴覚障がい者が、災害時に情報取得難とコミュニケーション難に陥りやすいという、当事者ならではの視点から、聴覚言語障がい者用災害対策マニュアルの作成を企画している。社会ニーズも高く、地域の課題に主体的に取り組む姿勢が高く評価できる。また、災害対策検討委員会を設立して、地域の協力関係を築けており、誰もが住みやすい地域づくりへのモデルとなりうる可能性をもっている。</p>

■ 特定非営利活動法人 京都子どもセンター (京都)

団体概要	親子の観劇活動を経て、1989年に公益的な活動のため組織を改編、1999年より現体制に。「子どもの権利条約」の精神を大切にしながら、「おやこ狂言会」「チャイルドライン京都・子ども電話」など、子ども達に様々な体験・社会参画の機会を提供。また、子育ての支援に関わる人の輪を広げることによって、すべての子どもが伸びやかで豊かな子ども時代を過ごすことのできる社会環境の整備に寄与する。
事業概要	この事業は、育児支援の活動現場で地震が発生することを想定し、子ども達と指導員の参加によって防災に関するワークショップを実施するものである。また、そのドキュメンタリー記録として「子どもによる、子どもの視線の、子どもが参画できる防災マニュアル」ブックレットを作成する。
講評	子どもが主体になって取り組む防災ワークショップとドキュメンタリー記録の試みはユニークで、社会的な評価が高い。これまで様々な子ども向けの活動を実施している当団体が、そのノウハウを活かして子どもと大人と一緒に学びながら、それぞれが自分のできることを探し、その智慧をストックするこの企画は、防災をキーワードとした子どもの自主性を育てる機会の提供である。地域で子どもが育つ中でモデルとして、広く他地域へと波及することを期待する。

■ 特定非営利活動法人 京都フィルハーモニー室内合奏団 (京都)

団体概要	年間約 140 回に及ぶ市民・子どものための音楽演奏・教育活動などを通じ、音楽文化の普及、発展、向上に寄与することを目的としている。阪神・淡路大震災の年には明石の幼稚園にてボランティア演奏、その後チャリティコンサートへも出演。その他中越震災被災地や丹後地方水害被災地でも公演。
事業概要	本事業は、敬老の日に行われるコンサートに、阪神淡路大震災の被災者の中から、年配の方を中心に 50 名を京都コンサートホールに招待し、日本の美しい歌の数々を演奏する特別公演を行うものである。実施にあたっては市民ボランティアを募り、介護が必要な人を含め、会場までの送迎を実施し、心の被災地支援を行う。
講評	本事業は、芸術文化を切り口とした被災者の「心の復興」を実現する試みである。各地で公演会を展開してきた団体の実績と、阪神・淡路大震災後の被災地での演奏とその後のチャリティコンサートへの継続的な参加、あるいは中越地震後の小学校公演事業などの災害復興関連の事業実績が土台となっている。10 年を経ても、日常の孤独感など精神的ストレスなどの問題は容易には解決せず、当団体の試みは、幅広い災害復興のひとつとして評価できるものである。今後は阪神・淡路大震災の被災者だけにとらわれない柔軟性と一過性では終わらない展開を望みたい。

■ 神戸一中越つなぐ実行委員会 (大阪)

団体概要	2006年始めの「神戸一中越被災地交流会を受けて、神戸の経験の中越被災者支援に生かすために設立。当面2007年3月までの活動期間を想定し、その後の継続的支援の担い手となる現地新潟の学生を巻き込んだ活動を試みている。
事業概要	本事業は、現在中越地震の被災者に行っている足湯やお茶のみサロンを継続的に行いながら、仮設住宅に住まれているかたの生の声を記録し、これを課題別に整理、具体的な提言としてまとめ、神戸で報告会の形で発表するものである。また、神戸で継続的に仮設・復興住宅での支援に携わった支援者や生活支援相談員を中越に派遣し、中越側の支援者と交流、意見交換をし、神戸の経験と知恵を中越につなぐ。
講評	神戸と新潟という大規模震災被災地相互で経験を共有しあい、真に被災者のためになる支援を行っていく本事業の必要性は必然である。また、本団体を構成し、実施主体となっている大阪大学 from HUS と NVNAD は、中越地震以来、地元の間支援組織と連携して新潟で活動を展開しており、事業の継続性が期待できる。学生が中心に活動を展開している当団体は、今後は地元の学生とも協働し、神戸の経験を地元の若者に引き継いでいくことを試みており、その独自性と意欲を高く評価したい。

■ 兵庫日本語ボランティアネットワーク (兵庫)

団体概要	阪神大震災以降に数多く生まれた外国人への日本語学習支援グループ・団体のネットワーク組織として1997年に設立。県内の支援グループ、個人ボランティアを会員として、学習支援活動、情報交換、研修会開催などを通じ、多文化多言語社会の創生の一助となることを目指している。
事業概要	本事業は、兵庫県内に数多く在住する日本語が不十分な外国人に向け、「防災に関する日本語学習教材」を作成する。それを日本語教室での授業に用いたり、防災セミナーを実施することで、防災に関する情報を在住外国人に広く伝える。
講評	コミュニティ内で様々な文化を背景とする人が共存しなければならない状況が増加する昨今、外国人に向けた防災意識啓発を行う本事業は、地域づくりの面からも評価できる。在住外国人が通う日本語学校のネットワークを持つ本団体が、防災教材作成とセミナーを行うことは、地域における着実な成果と、一定の効果が認められる。教材の完成度が事業を左右するので、当事者に近い目線から作られた本当に役に立つ教材の作成とその活用を期待する。

■ 特定非営利活動法人 ゆめ風基金 (大阪)

<p>団体概要</p>	<p>阪神・淡路大震災で被災した障がい者の生活復興支援とともに、いつおきるとも知れない災害の備えとして救援基金を設置、障がい者や高齢者が生命や人権を脅かされることのない適切な支援活動が行われるようサポートしている。これまでに、北関東水害、台湾地震、北海道十勝沖地震などの被災障がい者支援を行い、2004年には中越地震や福岡県西方沖地震などにおける被害に対し、計611万4千円を支援。</p>
<p>事業概要</p>	<p>本事業は、昨年8月から約1年間かけて検討を進めている「障害者市民防災提言集」の完成にあわせて、行政関係者、被災関係者、障がい当事者、学識経験者などをパネラーとした防災シンポジウムを開催するものである。提言作りの過程で浮き彫りになった災害支援の現状や障がい当事者が感じていることなどを広く発信する目的で、開催規模は300人規模を想定しており、多くの人の知る機会作りを目指している。</p>
<p>講評</p>	<p>近年相次いで日本列島を襲った大規模災害は、障がい者、高齢者などのいわゆる災害弱者の間の被害の大きさを再認識させるのに十分であった。本事業は現在の災害支援の状況を分析し、障がい者の生の声を対策に生かすことを目的としており、社会的必要性は大きい。当団体は、大規模災害被災地における障がい者への支援活動を長年展開しており、組織の運営体制や継続性において高く評価できる。今回企画として出された事業は、これまでの活動の集大成と言えるものであり、当団体の持つ各地のネットワーク団体への事業終了後の波及も見込める。関西発で全国へと効果の広がりを期待したい。</p>

(50音順)